
【研究主題】未来の輪島を創造していく担い手を育成する「WAJI活（輪島活性化プロジェクト）」

【副題】～輪高生（りんこうせい）による街づくりプロジェクト（街プロ）～

【学校・団体名】 石川県立輪島高等学校
【役職名・氏名】 校長 平野 敏

1 はじめに

令和6年能登半島地震により、輪島市では多くの家屋が倒壊し、道路も亀裂や陥没により寸断された。輪島塗の店や工房の多くが損壊し、観光名所である朝市も大規模火災により焼失、さらに海底隆起により漁業も大きな打撃を受けた。このような厳しい現実を直視したうえで、その中に希望を見出し、現実と希望の間のギャップを課題として捉えて、その解決に向けた探究活動を行うことで、実際に未来の輪島を創造していく担い手を育成することを、本プログラムの目標としている。

本校では、2009年からふるさと探究に取り組んできた実績がある。2020年に「総合的な探究の時間」がスタートするにあたってそのさらなる充実をはかり、「WAJI活（輪島活性化プロジェクト）」と名づけて、輪島の「今」と「未来」を見つめて各自が設定した課題に基づいたグループ探究活動を行ってきた。本年度からはこれまでの取組をいかし、未来の「街づくり」に特化した形での活動を進めている。

2 WAJI活

(1) これまでのWAJI活

WAJI活とは、世界農業遺産である「能登の里山里海」を擁する地方都市輪島を舞台に、地域の課題を発見し、その解決に向けて探究する過程や成功体験を通して自己変容を促すプロジェクトである。3年間を通して、探究の手法を学び、調査活動を経て課題を発見し、解決に向けての方策について行政や一般社会へのPR活動を行ってきた。さらにその活動について論文にまとめ上げることで、地域活性化のための観光産業と住民が安心して暮らせる生活環境が両立した、持続発展できるまちづくりの担い手を育成することを目的としている。

令和5年4月、輪島市の人口は2.4万人を割り、高齢者の割合は47%を占めている。この事態を打開するには、市内の高校生が地域の魅力を理解し、地元産業の担い手となる、または、他県で輪島市の魅力を

PRできる人材となる必要がある。特に、里山と里海の恵みによって第一次産業と観光業が両輪となって発展してきた輪島市においては、農林水産業とそれに付随した特産品への理解は大切なポイントである。自然や伝統産業、観光資源の宝庫である輪島に生まれながら、その魅力に気づかず、発信する方法を知らない本校生徒に対して、このプログラムを通して、自分の世界は自分の意志によって広げられるという夢を持たせ、自己実現に向けての目的意識を醸成してきた。

(2) これからのWAJI活

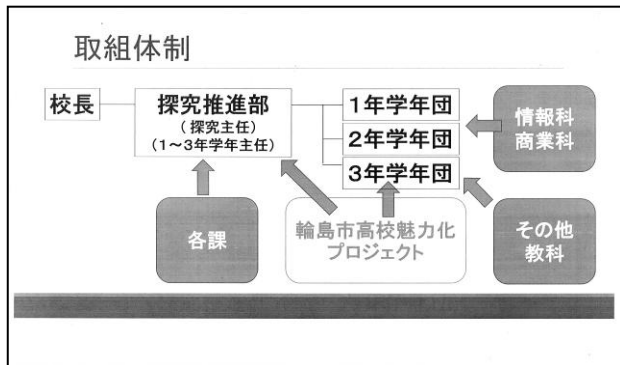
元日の能登半島地震により変わり果てた街は、発災から半年以上を経てもなお復興の兆しが見えない。このような現実には傷つき、戸惑い、悲しみや絶望から前を向けなくなっている大人も多い。ましてや多感な高校生は、表面的には以前と変わりなく見えても、心の中に大きな傷や葛藤を抱え、街の風景や生活の変化に慣れたふりをしながら毎日をやり過ごしているようにも思える。「WAJI活」が目指してきた、「今」を見つめる目と「未来」を夢見る力、そしてその間にあるギャップを課題として捉える力、その解決に努める計画力と行動力、それらは平時であればすらすらと口にできるものであるが、今の彼らにとってはどんなに困難なものであるかを思い知らされている。活動においても、これまでの活動のほとんどが継続困難となり、活動を継続させるための引継ぎをする機会も失ってしまった。

しかし、このような苛酷な現実の中にこそ、希望を見出し、その実現のために探究し、行動を起こすことで達成感や自己有用感を得ることは、今後の彼らの人生にとっても、輪島市にとっても、大きな力となるものであると考えている。「大変」を「大きく変わるチャンス」と捉え、生徒たちを「被災地の可哀な高校生」から「今と未来のために積極的に行動できる力強い高校生」に変えて、実際にふるさと創生を担う人材として育てる取組にしたいと考えている。

(3) 3つの課題

- ① WAJ I活のコアとなる生徒の育成
- ② 学年を超えた学び合いの充実と継続研究
- ③ ファシリテーション能力を備えた教員の育成

3 令和6年度 校内の取組体制



校内の取組体制は、学校長を筆頭に、探究推進部が組織されており、外部機関との連絡・調整、学年間の調整や情報交換、組織的な取組への計画などが練られている。学年団以外にも教科担当者や輪島市高校魅力化プロジェクト魅力化推進スタッフが生徒たちをサポートしている。魅力化推進スタッフとは、令和3年度より輪島市が立ち上げた「輪島市高校魅力化プロジェクト」の推進スタッフであり、公営塾の開塾など、小中高一貫した教育制度の改革を手掛けており、高校では探究型学習を中心にサポートし、積極的に学校と地域をつないでいる。また、令和6年度より認定NPO法人カタリバにも協力いただいております、県を超え、国を超え、活動の幅を広げていきたいと考えている。

4 令和6年度 プログラムの計画

【1年次生】探究の基礎を学び、プランニングする。

〈1学期〉「探究基礎演習」を通じて、思考を広げる。

「次の時代に求められる、人の力」「描いた未来を実現する力」「他者の視界を描く力」などの講座を実施する。また、3年生の探究成果を聴いて関心を高めるとともに、探究内容やゴールをイメージする。

〈2学期〉不自由研究（ミニ探究）を通じて、探究の一連の流れを体験する。

課題の設定をあえて教員が行い、複数のテーマの中から生徒が選んで行う「不自由研究」によって、生徒のみならず、教員のファシリテーション能力育成にも繋げる。また、2年生の探究活動にも参入し、縦の連携をはかる。

〈3学期〉グループで話し合い、探究テーマを決定す

る。

探究テーマを仮設定し、他の市町村モデルなど先行事例を研究する。探究計画の発表に際して、外部よりメンターを招き、アドバイスをいただくことで、課題の捉え方や切り口を変える力、見通しを立ててプランニングする力を養い、計画を見直して実効性のあるレベルにまで高めていく。

【2年次生】探究計画に基づいて活動し、成果を発表する。

〈1学期〉探究計画に基づいて、適宜フィールドワークを行う。

地域や行政とも協働しながら、生徒が自主的に探究活動を行う。本校はこれまでも、地元企業と連携による商品開発や朝市での販売活動、CM制作などを行ってきたが、そのノウハウも十分に活かす。また、アステナホールディングス株式会社との連携により、起業の視点からのアプローチをはかる。

〈2学期〉それまでの成果をまとめ、発表する。

まず学年で実施し、互いの発表に対して意見を交換し内容を練り直す。1年生や保護者、地域や行政の関係者などを招き、質疑応答を実施して探究の更なる深化を目指す。

〈3学期〉学校外での成果発表により、自己有用感を高める。

他校との合同発表会を開催して交流を図ったり、大会やコンテスト等に積極的に参加したりすることで、社会に向けた発信力を養うとともに、探究によってより良い未来を実現することが可能となることを体験し、未来を創造するのは自分たちであるという実感を得る。

【3年次生】自己の進路や生き方と探究を結びつける。

探究成果を論文にまとめたり、探究成果を後輩に引き継いだりしながら、自己の進路と探究を結びつけてさらに深化発展させる。

5 WAJ I活のコアとなる生徒育成への取組

ある一定数いる消極的な生徒に対して、豊富な地域資源をテーマとして対象化したり、各々が興味関心を寄せるテーマを優先したりしてきた。また、探究スタイルも個人にしたりグループにしたり、その時期も試行錯誤してきたが、積極的に地域に足を運ぶことができたグループや様々な事業に参加できた生徒が、目標達成へ向けてのPDCAサイクルを回し、地域の魅力を活かす視点を発見することができている。また、海

外研修や海外高校生とのオンライン研修を経験した生徒がその成果を生かし、探究学習において中心的役割を果たしてきた。様々な経験や体験を通して、広い視野で課題を捉える視点や地域社会の将来に対して、自分ができることを考え、実現しようとする姿勢、身に付けた探究のノウハウが、他の生徒をさらに成長させてくれるのである。そこで本校は、積極的に校外活動を行い、校外研修や様々なプログラムへの参加を推奨している。以下の表は主な取組である。

R4	<ul style="list-style-type: none"> ・パリ研修 ・オンライン地域課題探究プログラム ・アントレプレナーシップ教育推進事業 ・輪島塗展示即売会 ・第1回地元農家さんとのスイーツフェスタ開催 ・探究型推進事業合同発表会
R5	<ul style="list-style-type: none"> ・朝市英語ガイド ・起業ゼミ概略 ・オンライン地域課題探究プログラム ・アントレプレナーシップ教育推進事業 ・輪島市U-18議会プロジェクト(中止) ・群馬県立高崎高校との情報交換会 ・第2回地元農家さんとのスイーツフェスタ開催 ・サイエンスツアー (国立博物館、JAXA、日本科学未来館など) ・マイプロジェクトサミット訪問ツアーin 東京
R6	<ul style="list-style-type: none"> ・東北震災復興研修 ・転生プロジェクト ・アントレプレナーシップ教育推進事業 ・熊本津波サミット ・三菱みらい育成財団 高校生MIRAI 万博 エントリー ・OECD Education2030「プロジェクト無限大」 ・東京立正中学高等学校との情報交換会 ・ビヨンドトゥモロー主催 夏期学生交流プログラム

(1) 実践例 (令和5年度まで)

目の不自由な方にも輪島へ観光に来てほしいと考えた生徒のアイデアは、アントレプレナーシップ教育推進事業を通して、輪島白杖を使った観光という事業計画に練り上げられ、発表会を通じて多くの企業人から高い評価を得ることができた。彼は輪島塗を活かし

た新たな観光の提案にとどまらず、住みやすい街づくりの構想を考えており、今後も地方都市における課題解決に取り組みたいと自身の進路と結び付けて探究してきた。令和5年8月には、彼の探究学習に関心をもつ生徒たちと共に、日本語で話す白杖を開発した群馬県立高崎高校の生徒と情報交換を実施することができ、スマート白杖の可能性に期待を膨らませた。また、同じグループの一人がパリ研修へ参加し観光都市パリの取組を調べてきた。輪島の観光地にレプリカを置くなど、輪島白杖と共に輪島観光の新たな取組を提案していくため、石川県の社会福祉協議会と連携し観光計画を練り始めていた。残念ながら震災により活動は中止となったが、彼らの思いは変わらず、それぞれが次のステージで輪島市の課題解決に取り組む予定である。



▲アントレプレナーシップ教育推進事業の様子
(左は令和4年度、右は令和5年度)



▲高崎高校との
情報交換会の様子 ▲パリ研修の様子

(2) 実践例 (令和6年度)

4月「どんな街なら住みたいか、戻ってこよう、行ってみたいと思うか」を想像することから活動が始まった。様々なカテゴリーの中で、「祭り」を選んだ生徒たちが花火を打ち上げることで輪島を元気にしたいと思い、6月に活動計画を発表した。多額の費用がかかること、大きな音は被災者に不安を与えるのではないかという消極的な意見に戸惑いながらも、毎年、輪島市の祭りで打ち上げ花火を見てきた生徒たちは、打ち上げることにこだわり、協力者を募った。オンライン会議を通して、花火業者と連絡をとり、CFや募金で資金集めに奔走し、ピラ配りや当日の交通規制なども自分たちで計画し実施した。その結果、今年8月23日に応援メッセージが書かれた600発の花火が輪島

の夜空に舞い上がった。当初、実現が困難と思われた打ち上げ花火は見事成功し、企画した生徒のみならず多くの生徒や輪島の人たちに笑顔と勇気を与えることができた。



▲オンライン会議の様子



▲金沢で行った募金活動の様子

打ち上げ花火 ▶



6 継続研究への取組

学年を超えた学び合いを重視し、これまでにできた活動や今後発展させたい活動を継続する仕組みを作る必要がある。これまで、成果発表会を参観し合うだけであったが、令和5年度は探究学習の開始当初から積極的に上級生によるプレゼンテーションの場を設定した。1・2年生は探究への関心を深めたり、ゴールをイメージしたりすることができ、上級生は探究の内容についての理解をより深めることができた。また、上級生がアドバイザーとなり下級生の活動に参加するなど、先輩と後輩の活動を結び付ける場を設ける予定だったが、地震によりその機会を奪われてしまった。令和6年度は、不自由研究の後、合同授業も視野に積極的に1・2年生が交流する機会を増やしていく予定である。



▲上級生によるプレゼンの様子



7 教員育成への取組

本校は、教員の平均年齢が30代、しかも新規採用教員が例年1～3名程度配属される若い職場である。若手教員を「未来からの留学生」と位置づけ、教員育成にも力を入れている。

1年生を対象とした課題の設定を教員があえて行う「不自由研究」を個別に実施することにより、ファシリテーション能力の向上を図っている。また、各グループの進捗状況を可視化し共有することで、若手教員のサポート体制を充実させている。



▲「不自由研究」での先生によるプレゼンの様子

8 成果と課題

令和5年度のアンケートは震災により実施困難となり、成果を示すデータは得られていない。

未来の輪島を創造していく担い手の育成には、輪島への愛着と探究スキルが両輪となって成長することが望まれる。令和4年度のアンケートでは、「輪島に対する興味関心は高まりましたか」という問いに81%の生徒が高まったと回答し、知識・技能や思考・判断・表現などの項目をルーブリック表を用いて自己評価した結果、多くの項目で自身の成長を感じることができていた。生徒に対する教員の評価も生徒の成長を感じさせる結果であった。しかし、愛着が増した先に、将来の輪島のために行動しようとする態度の育成が大事であり、残念ながら「輪島の将来に対して自分ができることを考え、実現しようとする態度が身についた」と回答した生徒は26%にとどまった。WAJI活開始時より12%増加したものの、より一層高める工夫をしていきたい。

震災後の令和6年度は、課題を発見し、探究することが、現実を変えたり未来を創造したりすることに繋がるという実感を生徒がもつことで、自己有用感・自己肯定感を高め、困難な現実にも立ち向かえる心身ともに逞しい生徒の育成に繋がりたいと考えている。「WAJI活を通して自己有用感が高まった」と回答した生徒の割合が81%だった令和4年度を目安に、それ以上の生徒が自己有用感・自己肯定感を高められるように、積極的に市外へ赴き、活躍と交流の場を広げていきたい。